5) 車椅子取付テーブルの試作

国立療養所　医王園
正　木　不二麿　　中　山　　緑
崎　田　朝　保

<はじめに>

ＤＭＰ児童の療育の場において、自主性，主体性を側面より援助，配慮することの大切さは、言うまでもなく、無気力，無関心とも深くかかわってくるものと思われる。従って、当園においては、スペースの許すかぎりにおいて、生活活動に要する自助具を個々に試作してきた。しかし、障害度，身長，体重等の変化につれて、車椅子の増加と共に、その種類も多くなり、電動リクライニング車の導入とあいまって、食事，余暇活動，学習面において、テーブルの多様性が望まれ、設置して置く事は、スペースの狭少化を招き、許されないのが現状である。病棟内スペースの問題が解決されないかぎり、又、患児童の生活活動と、残存機能が無視されないかぎり、現状においては、年々必要性が生じてくると思われるので、車椅子の実態について、調査を行なった。

<実態調査>

1. 現在、当病棟にて使用している車椅子２２台について（電動車は除く）

調査内容項目	最小	最大	その差
車椅子の幅（パイプ間）	35.0 cm	46.5 cm	11.5 cm
床面より坐面シートまでの高さ	39.5	51.0	11.5
床面より肘掛けまでの高さ	60.0	74.0	14.0
坐面より肘掛けまでの高さ	17.0	25.0	8.0

2. キャスター取付アームを中心に、机に対する入り具合についてみると、食事では０～１３cm、学習場面では０～１５cmであった。

上記調査と現況より、以下の条件を満たすものを基本に、試作を行なった。

イ．高さの調整，テーブル面の前後スライド，車幅の調整によって、１個の車椅子取付テーブルが、総べての車椅子に取付可能であることを第一とする。

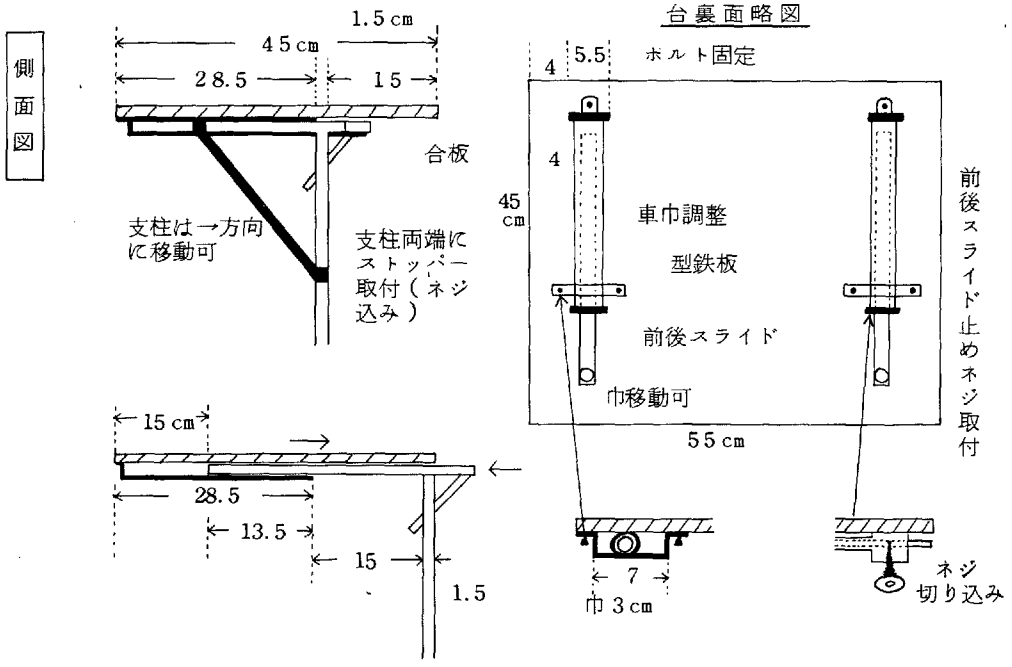
ロ．テーブルを取付たままで、車椅子操作が可能であること。

ハ．取りはずしが容易で、園外行事等にも利用できること。（食事，作業を伴なった場合の選定場所の制約緩和のため）

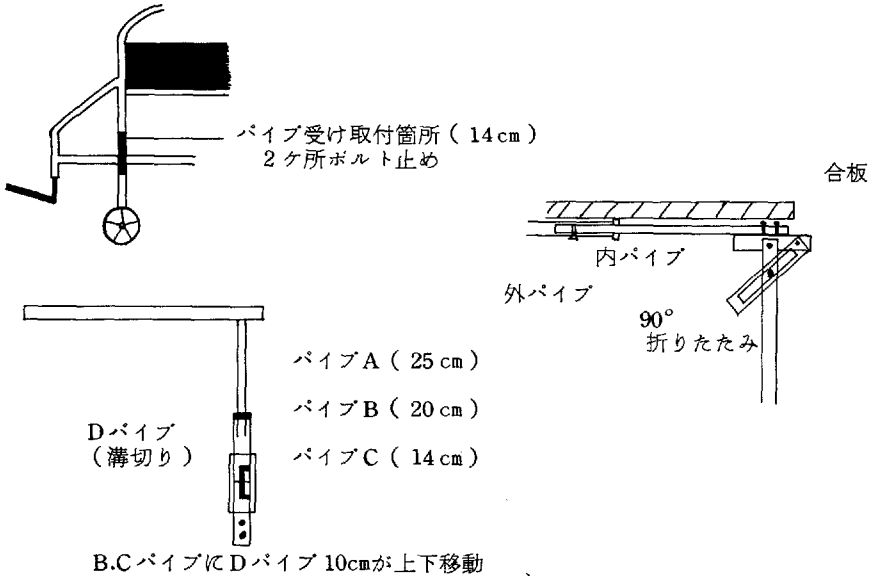
ニ．取付位置は、目的によって、平素必要としない事も考慮して、テーブルの受けパイプ取付位置

は、キャスター取付アーム部の上とすること（長さ１４cm）

上記４項目をみたす調整可能なテーブルの略図



受けパイプ取付位置



<おわりに>

生活場面より考察された、用途と各人によって異なるＤＭＰ児童の多目的テーブルの試作をとうし

て、今後さらに、以下の３項目について、改良，検討を重ねて行きたい。

1. 材質の軽量と簡素化及び各部調整の為のストッパーの改良。
2. 斜面スライドストッパーが、或る患者では、ブレーキレバー操作の障害となる点。
3. テーブルが回転した時の強度と角度維持の方法について。

6）車　椅　子　の　選　び　方

国立療養所　再春荘
境　勇祐　上野和敏
泉　純治　岡元　宏

ＤＭＰ患者は歩行不能以後車椅子生活が多くなる。現在まで病状に良く適合した車椅子の選び方については、萩島先生等の報告がある。そこで一般的な事項について記述してみますと、ハンドリムは大きいもの，安全ベルトはゆとりのある丈夫なもの，フットレストは充分にふんばれる位置に取りつける，シート幅は腰幅に５cm位加える，アームレストは調節可能にする等である。歩行不能者の筋力は下肢，軀幹の筋ばかりでなく、車椅子運転の主力になる上肢筋も筋力低下がある。そこで残された筋力で、障害度に応じた車椅子の開発が必要である。そこで我々は、車椅子開発の前段階として現在使用している２種類の車椅子、即ちスタンダード型及びトラベラー型車椅子と障害度との関係について、どの車椅子が適しているか検討した。

現在当荘に入所中の患者１４名について調査した障害度分類では、Ⅱ－６　５名，　Ⅱ－７　４名　Ⅱ－８　５名　である。

<方　法>

１０ｍの直線，蛇行，登坂コース及び段差乗越えの四段階について、測定を行なった。障害度Ⅱ－６の患者では、直線及び蛇行に要する運転時間について測定したスタンダード型及びトラベラー型では、それぞれ直線に運転時間が短かく、蛇行には長時間を要した。運転姿勢は両型ともにハンドリムを握り、楽に運転していた。半年後の測定でも変化はみられなかった。また、登坂及び段差乗越えでは、前かがみになりフットレストに足底を押しつけて運転していた。この段階では比較的に上肢の機能が残されており、トラベラー型よりもスタンダード型車椅子の方が、運転しやすいようである。

障害度Ⅱ－7.8の患者では、直線及び蛇行に要する運転時間はスタンダード型よりも、トラベラー型車椅子の方に時間が短かく、スタンダード型では運転できない者もあった。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<はじめに>

DMP 児(者)の療育の場において、自主性,主体性を側面より援助,配慮することの大切さは、言うまでもなく、無気力,無関心とも深くかかわってくるものと思われる。従って、当園においては、スペースの許すかぎりにおいて、生活活動に要する自助具を個々に試作してきた。